

「危機の指導者 チャーチル」

富田浩司(著)

新潮社 2011年9月20日刊

本書は20世紀におけるイギリスの偉大な指導者ウィンストン・チャーチルの人生を多面的に論じた歴史読物である。イギリスではチャーチルについて新たに公開された歴史資料などに基づいて、彼の伝記が現在でも書き続けられているが、日本では新たな研究が活発に行われているようには見受けられない。

そのような状況下で、外交官である著者は、近年の資料や著作を参考に、チャーチルの政治手腕、とりわけ国家的危機に直面した際の外交と軍事に関する彼の判断や選択、その帰結について、冷静に検討を加えており、読みごたえのあるチャーチル論を提示している。

本書はチャーチルについて書かれたものであるが、より広範な問題意識も含まれているように思われる。まず、チャーチルは自分の経験を著作にすることを意図して記録を積極的に残したが、政治や政策決定に携わった人々の記録・アーカイヴを残すことの重要性を強く意識させられる。同時に、現代史でかなりの資料があり、政治的立場の確立しているチャーチルでさえ、死後50年近くたってもその評価が確定していないということも重要である。多様な制約の下で適切な歴史の教訓を得ることの難しさを実感する。

次に、本書の第7章で触れられているように、第2次世界大戦中に国民の意識は次第に戦後復興や福祉国家へシフトしていき、1945年7月の総選挙では国民は平時の指導者としてアトリーの率いる労働党政権を選択した。

また、チャーチルは全力でイギリスの覇権を守ろうとしたにもかかわらず、第2次世界大戦の終了と同時に覇権は完全にアメリカに移ってしまった。国家が世界史においてその役割を果たし終えた時には、いかなる指導者であれその流れを変えることができないということは厳しい現実として受け止めなければならない。

最近、ユーロ問題で動揺しているヨーロッパ諸国であるが、戦後のヨーロッパの経済統合の歴史は、二度の世界大戦で戦場となったヨーロッパの人々の願いを反映したものである。この記憶なしに現在のユーロ問題の先行きを考えることは出来ないということも本書を読みながら考えさせられた。